

ITP ヨーロッパ派遣報告書

派遣大学 : エクス・マルセイユ第一大学
(プロバンス大学) (フランス)

派遣期間 : 2009年7月～2010年2月

東京外国語大学博士後期課程

高原由紀子

プロバンス大学への留学の主な目的は、フランスでの博士号取得にありました。2006年9月から2009年6月まで、フランス政府の援助を受けてプロバンス大学に留学し、研究対象の作家コレットの専門家であるヤニック・レッシュ先生（エクサン・プロバンス政治学院教授）の指導の下で、コレット作品における旅をテーマに博士論文を書いていたのですが、2009年7月からは、ITPプログラムによって、フランスでの論文の執筆、及び研究活動の継続をすることができました。この報告書では、プロバンス大学における博士論文の執筆の過程と研究環境を報告し、最後に留学の目的の達成度を自分なりに評価したいと考えています。

ITPプログラムの開始以前に、すでに論文に必要な文献は読み終わり、論文も3分の2ほど書けていたので、ITPプログラムでは、引き続き論文の執筆に専念し、論文を完成させることを目標としていました。指導教官のレッシュ先生とは、先生の御都合や論文の進行状況に応じて、1週間に一回から3週間に一回ほど面接指導を受け、レッシュ先生との議論を通じて研究テーマの分析を深めつつ、論文を執筆しました。この過程においては、レッシュ先生と直接お会いして、定期的に論文について話し合うことが不可欠でした。また、レッシュ先生からは、フランス語での論文作成についての心得を随所で御教え頂きました。論文の執筆は、昨年末にほぼ終わり、手直しを経て、1月中に完成させることが出来ました。論文の公開審査は5月6日に予定されています。

プロバンス大学での研究環境は、大学図書館も非常に整っており良好でした。必要な文献がエクサン・プロバンスでは全て揃わず、他大学の図書館からの文献取り寄せサービス、及び隣町のマルセイユの図書館などを利用することもありましたが、大きな不自由を感じることはありませんでした。

今回の留学でやや残念だったことは、エクサン・プロバンスにおいて指導教官の先生以外の研究者との交流がやや少なかったことです。指導教官の先生の所属が大学のフランス文学科ではなく政治学院だったこと、また、大学への登録に当たって名義を貸してくださったガルド先生が、私の入学と同時にパリのソルボンヌ大学に移籍されたこと、フランスの博士課程には授業がないことなどが理由で、プロバンス大学の先生と交流する機会が少なくなりました。しかしながら、大学で催された講演会は積極的に聴きに行くなどして、専門分野以外の知識も増やす努力をしました。また、大学のみならず、政治学院での文学関連の学会や講演会も聴きに行き、とくに、フランス語圏、主にケベックにおける都市と文学の関係をテーマにした学会は、文学の知識の幅を広げる上で、非常に有益でした。

指導教官の先生の丁寧な指導と良好な研究環境に恵まれて、博士論文を完成することが出来ましたので、ITP プログラムでの目標をほぼ達することが出来たと言えます。当初は ITP プログラムが終了する 2 月までに博士号を取得することを目指していましたが、論文の完成がやや遅れたこと、さらには公開審査の審査員の先生のご都合などもあり、博士論文の公開審査は 5 月 6 日にずれ込みました。しかしながら、指導教官の先生からは公開審査を受ける許可を受けることができましたし、審査員の先生方から公開審査前に提出が義務付けられている報告書で肯定的な評価を頂き、大学側から公開審査の正式な許可がまもなく下りるものと思われしますので、ITP プログラムの目的は、ほぼ達成することが出来ました。

また、博士論文の執筆を通じて、文学テキストの分析力、フランス語で論文を執筆する力を付けることが出来ました。今後は、レッシュ先生の指導を離れて、自立した研究者として、フランスなど海外の研究雑誌などに論文を投稿し、

研究を発表することが出来るだろうと考えています。また、今回のフランス留学中（ITPプログラム開始前）に、国際学会で発表をする機会もありましたので、そのような経験を生かして、今後も日本の内外で積極的に研究成果を発表していきたいと考えています。

この報告書では、ITPプログラムにおける研究成果と、プログラムに参加する以前の留学の成果の区別が曖昧にならざるを得ませんでした。3年半前からフランスでの博士号取得を目指して留学しており、ITPプログラムによって、その研究活動を継続する形となりましたので、ITPプログラムの成果を、プログラム開始以前の研究成果と切り離すことが出来ませんでした。ITPプログラムは、論文執筆の最終段階を支え、論文を完成に導いたという意味で、私にとって非常に有意義なプログラムでした。最後に、外大での指導教官の博多先生を始め、関係者の皆様に御礼を申し上げます。